

II 大学の動き

国際交流

● 教官の国際交流

教官の海外派遣は0.66回/年であり、教官すべてを平均すると3年に2回出張または研修のために海外に派遣されていることが分かった。その出張先は欧米先進国がもっとも多く、次いでアジア近隣諸国となっている。

海外研究者の来訪のなかでは、本学に滞在して研究に従事する「外国人客員研究員」制度が順調に機能している。

● 学術交流協定

本学が学術交流協定を締結している海外の大学は、中国（4）、アメリカ、カナダ、フランス、イタリア（各1）であるが、中国を除けば主として研究者の交流や共同研究を基本としている。中国に関しては、留学生の受入が活発である。ミシガン大学（アメリカ）からは、カリキュラムなど教育制度の面でもいろいろと学ぶ機会が作られている。

● 学生の留学

本学学生の留学は大学院生に限られ、5年間に9名、すべてが欧米の大学であった。また協定校が9名中6名であり、協定の有用性が明らかとなった。

● 外国人留学生

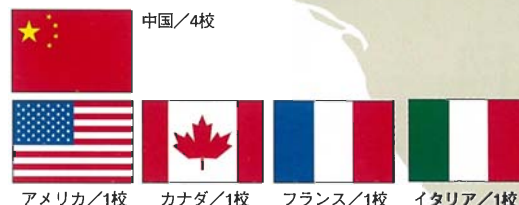
過去5年間の本学における外国人留学生の在籍数は各年度約27名で、ほぼ一定であった。外国人留学生の国籍は圧倒的に中国が多く、より広範な国からの留学生を増やすことによる留学生数の増加が望まれる。

本学の留学生であったものが現在どのような立場にあるかを追跡調査したところ、まだ留学生の受け入れが盛んになってから日が浅いにも拘わらず、中国、台湾、フランス、コンゴの8大学において助教授となっていることが判明した。また講師の職にあるものも多く、今後の一層の活躍が期待され、留学生制度の成果が裏付けられた。

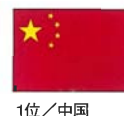
● 国際交流支援体制

国際交流を支援する体制としては、事務組織の改組による「研究協力係」の新設が特筆される。科学研究費、奨学寄付金、受託研究などの資金面の事務のみならず、教官の海外渡航など国際交流に関する業務のほとんどを担当し、大

学術交流協定を締結している海外の大学



外国人留学生の在籍数
(過去5年間)
約27名/年



留学生は今… 中国、台湾、フランス、コンゴの
8大学で 助教授に

きな力となっている。

教育面から国際交流を支えることを目的として、学部ならびに大学院のカリキュラムの中に「医学英語」と「医学英語論文の作成法」が取り入れられ、さらにボランティアによる「模擬国際学会」や「体験的医学英語入門講座」などが行われるなど、活発な活動が始められつつある。

● 評価と将来

過去5年間の本学の研究業績に占める国際共同研究の重要性を調べたところ、impact factorのある雑誌に発表された論文のうちの12.3%が国際共同研究であり、それらのimpact factorの平均値3.15はそれ以外の論文の平均値2.19の1.4倍、また引用回数は、それ以外のものの2.7回に対し6.9回と2.6倍の値を示した。すなわち、国際共同研究による研究業績は国内のみで行われた研究の業績よりも質においてかなり優れていることが明らかとなり、国際交流活動の必要性を裏付けることとなった。

要約すると、本学の国際交流活動はかなり高いレベルであることが分かるが、いまだに「欧米に学びアジアに教える」立場を脱却はできていない。しかし、欧米先進国と対等なレベルでの活動も随所にその端緒が現れており、今後は一層この傾向を推進するとともに、アジア諸国のよきパートナーとしての交流を深めていくべきであろう。